

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌			慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に関するもの			
抗白癬菌成分	エキサラミド 医療用医薬品としてなし																
塩酸アモロルフィン	ベキロンクリーム 抗真菌作用・塩酸アモロルフィンは皮膚糸状菌(Trichophyton属、Microsporum属、Epidermophyton属)、酵母類(Candida属)、黒色真菌(Fonsecaea compactum等)及び黴菌(Malassezia furfur)に強い抗真菌作用を有した。作用機序 塩酸アモロルフィンの作用機序は、エルゴステロール生合成経路上の2つの段階を選択的に阻害することにより、細胞膜の構造、機能を障害し抗真菌活性が発現される。					0.1~5%未満(局所の刺激感、接触皮膚炎、発赤、そう痒、紅斑) 0.1%未満(糜爛、疼痛)			本剤成分過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠の可能性がある婦人				投与部位 眼科用として角膜、結膜には使用しない。	1日1回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌症の治療 ・白癬：足白癬、手白癬、体部白癬、股部白癬 ・皮膚カンジダ症：指間びらん症、間擦疹(乳児寄生菌性紅斑を含む)、爪囲炎 ・黴風	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 差用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果					
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意								薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの			
抗 白 癬 菌 成 分	塩酸ネチコナゾール ・アトラント軟膏1% ・アトラント外用液1%	抗真菌作用 ・塩酸ネチコナゾールは、 皮膚糸状菌をはじめ酵母 状真菌、黴菌などに優れた 抗真菌作用を示した。 主な臨床分離株に対する 最小発育阻止濃度(MIC) は次のとおりである。 作用機序 塩酸ネチコナゾールの作用 機序は、完全発育阻止及 び殺菌的作用を示す高濃 度域では直接的細胞膜 障害が、また部分的発育 阻止を示す濃度域において は真菌細胞の構成成分 であるエルゴステロールの 合成阻害が主で、その作用 による膜脂質組成の変化 が前者の作用を増強する ものと考えられる。			アトラント軟膏 0.1~5%未満 (局所の刺激感、皮膚炎、 発赤・紅斑、そう痒感、湿 潤、落屑の増加等) 0.1%未満 (亀裂、白癬疹) 頻度不明 (自家感受性皮膚炎) アトラント外用液 0.1~5%未満 (局所の刺激感、皮膚炎、 発赤・紅斑、そう痒感等) 0.1%未満 (亀裂) ((※軟膏と比較して刺激 感が多い。))		本剤成分過敏既往歴、著しい糜爛面	亀裂、糜爛面(アトラント外用液)			適用部位 ・眼科用として角膜、結膜には使用しない。 ・著しい糜爛面には使用しない。 ・亀裂・糜爛面には注意して使用する。	1日1回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌症の治療 ・白癬、足白癬、体部白癬、 股部白癬、皮膚カンジダ症、 指間びらん症、間擦疹、 黴菌			

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
				併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
抗白癬菌成分	シクロピロキスオラミン	パトラフェンクリーム パトラフェン液	抗菌作用 ・シクロピロキス オラミンは皮膚糸状菌及び酵母菌に広く抗真菌作用を示し、その作用は殺菌的である。 ・多くのグラム陽性、陰性の細菌類にも抗菌作用を示す。 作用機序 真菌細胞の膜及び膜系に作用して、細胞の増殖・生存に必要な物質の輸送機能を阻害し真菌を死に至らしめるものと考えられている。MICレベルでは、外部基質(電解質、各種栄養分)の細胞内への取り込み及び細胞内高分子物質(タンパク、DNA、RNA)の合成を阻害し、菌の発育を阻止する。高濃度(殺菌濃度)では、更に膜透過性阻害を示し、また、K ⁺ 、アミノ酸等の菌体成分の漏出を亢進させ、菌を死滅させる。					クリーム 0.1~5%未 満 (皮膚炎、皮膚刺激作用) パトラフェン液 ((*クリーム剤と同様の副作用報告))			本剤の成分過敏症既往歴、著しい臍爛面	・妊婦又は妊婦の可能性のある婦人 ・低出生体重児又は新生児 ・乳児寄生菌性紅斑(アルコール性基剤(エタノール等)の局所刺激作用) (ノトラフェン液) ・亀裂・臍爛面(ノトラフェン液)			使用部位 ・眼科用として角膜、結膜には使用しない。 ・著しい臍爛面には使用しない。 ・亀裂・臍爛面には注意して使用する。			1日2~3回患部に塗布又は塗擦する。	白癬:体部白癬、股部白癬、汗疱状白癬、カンジダ症、間擦疹、乳児寄生菌性紅斑、指間糜爛症	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効果効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
硝酸エコナ ゾール	パラベール クリーム・液	抗菌活性 ・本剤の抗菌 スペクトルは 広く、皮膚糸 状菌、 Candida albicans、そ の他の Candida属菌 種、Candida 以外の酵母 及び酵母様 真菌、黒色糸 状菌、 Aspergillus属 菌種、 Penicillium属 菌種、放線 菌、グラム陽 性細菌に対 して強い抗菌活 性を示す(in vitro)。 作用機序 本剤の作用 機序は、細胞 膜に一次作 用点を有し、 物質輸送と透 過性障壁を 阻害し、高分 子物質合成 阻害と呼吸阻 害を二次的に 誘起させ、更 に高濃度では RNA分解を促 進し、細胞発 育阻止又は 細胞死に至ら しめる					0.1~5%未 満 (皮膚刺激症 状(発赤・紅 斑、刺激感、 そう痒、灼熱 感、疼痛 等)、皮膚 炎、びらん、 水泡、腫脹) 0.1%未満 膿疱、丘疹			本剤に過敏な患者	・乳児寄生菌性紅 斑(アルコール性基 剤が局所刺激作 用)(液のみ) ・妊婦又は妊娠の 可能性のある婦人			・眼科用として角 膜、結膜には使 用しない。 ・本剤の基剤の 油脂性成分は、 コンドーム等の 避妊用ラテックス ゴム製品の品質 を劣化・破損する 可能性があるた め、接触を避け させる(クリームの み)。			通常1日2~3回患部に塗 布する。	下記の皮膚真 菌症の治療 白癬、足部白 癬(汗疱状白 癬)、手部白 癬(汗疱状白 癬)、体部白 癬(斑状小水疱 性白癬、頑 癬)、股部白 癬(頑癬) カンジダ症、指 間びらん症、 間擦疹、乳児 寄生菌性紅 斑、爪囲炎、外 陰炎(ただし、 外陰炎はク リームのみ適 用) 皸風	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 薬用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	効能効果			
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
抗 白 癬 菌 成 分	硝酸オキシコ ナゾール 液	オキナゾール クリーム 液	抗菌作用(in vitro) 硝酸オキシコ ナゾールは皮膚 糸状菌、酵母 状真菌、二 形性真菌(臨 床分離株)等 に対して広範 囲な抗菌スペ クトルを有し、 そのMICは10 μg/ml以下 であった。また、 好気性、 通性嫌気性 のグラム陽性 球菌及び桿 菌に対しても 抗菌活性を示 すことが認め られた。 作用機序 硝酸オキシコ ナゾールの抗 真菌活性は、 直接的細胞 膜障害作用 により発現さ れる。また、 低濃度域で の部分的発 育阻止効果 には、エルゴ ステロール合 成阻害作用 が関与してい る。			0.1～5%末 滴 (局所の発 赤、刺激感、 接触皮膚炎、 そう痒) 0.1%末滴 (局所の腫 脹) クリーム剤 総症例数 11,737例中 117例 (1.00%)196 件 主な副作用: 発赤61件 (0.52%)、刺 激感46件 (0.39%)、そ う痒の増強 40件 (0.34%)、接 触皮膚炎40 件(0.34%) 等 液剤 総症例数 2,226例中46 例(2.07%) 70件 副作用の内 訳:刺激感32 件(1.44%)、 発赤19件 (0.85%)、接 触皮膚炎11 件(0.49%)、 そう痒の増強 8件(0.36%)			本剤の成分過敏 症既往歴、著しい 皮膚面		・乳児寄生菌性紅 斑(アルコール性基 剤が局所刺激作 用。液のみ) ・亀裂、ひらん面 (刺激を生じること がある。液剤)		使用部位 ・眼科用として角 膜、結膜に使用 しないこと。 ・著しいひらん面 には使用しない こと。 ・液剤は、刺激を 生じることがあ るので、亀裂、ひ らん面には注意 して使用すること。 使用時 ・クリーム剤の基 剤の油性成分 は、コンドーム等 の避妊用ラテッ クスゴム製品の 品質を劣化・破 損する可能性が あるため、接触を 避けさせること。	1日2～3回患部に塗布す る。	下記の皮膚真 菌症の治療 白癬:足白癬、 手白癬、股部 白癬、体部白 癬 カンジダ症、間 擦疹、乳児寄 生菌性紅斑、 指間ひらん 症、爪囲炎、そ の他の皮膚カ ンジダ症 癬癩

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 副作用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効果効果				
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ				薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)				症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの				使用量に上 限があるもの	過量使用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ				
抗 白 癬 菌 成 分	硝酸ミコナ ゾール ・デムリード D軟膏 ・フロリードD クリーム ・フロリードD 液	抗菌作用(in vitro)→フロ リードD(ク リーム)より ・真菌に對す る作用 硝酸ミコナ ゾールは白癬 の起因菌である 白癬菌属、小 胞子菌属、表 皮菌属やカン ジダ症の起因 菌であるカン ジダ属をはじめ、アスペ ルギルス属、 クリプトコク ス・ネオフォ ルマンス等の 諸菌種に對し ても強い抗真 菌作用を有す る。 作用機序 硝酸ミコナ ゾールの抗菌 作用、生化学 的作用及び 超微形態学 的作用を検討 した結果、 硝酸ミコナ ゾールは低濃 度では主として 膜系(細胞 膜並びに細 胞壁)に作用 して、細胞の 膜透過性を 変化させるこ とにより抗菌 作用を示す。 また、高濃度 では細胞の 壊死性変化 をもたらす、殺 菌的に作用 する。					頻度不明 (発赤・紅斑、 そう痒感、接 触性皮膚炎、 びらん、刺激 感、小水疱、 乾燥・亀裂、 丘疹、落屑、 腫脹等) フロリードDク リーム 総症例 28,803例中 231例 (0.80%) 主として、発 赤・紅斑 (0.35%)、そ う痒感 (0.21%)、接 触性皮膚炎 (0.13%)、び らん (0.08%)、刺 激感 (0.07%)、小 水疱 (0.07%)等 の皮膚炎症 状であった。 0.1~5%未 満 (発赤・紅斑、 そう痒感、接 触性皮膚炎) 0.1%未満 (びらん、刺 激感、小水 疱、乾燥・亀 裂、丘疹、落 屑、腫脹等) フロリード液 総症例2,587 例中34例 (1.3%) 主として、そ う痒感 (0.4%)、発 赤・紅斑 (0.3%)、刺 激感 (0.2%)、落 屑(0.2%)、 乾燥・亀裂 (0.2%)、疼 痛(0.2%)等 の皮膚炎症 状であった。 0.1~5%未 満 (そう痒感、 発赤・紅斑、 刺激感、落 屑、乾燥・亀 裂、疼痛、小 水疱等)				本剤の成分過敏 症既往歴	・妊婦(3カ月以内) 又は妊娠の可能性 のある婦人 ・乳児寄生菌性紅 斑(アルコール性基 剤(エタノール等) の局所刺激作用)。 フロリードD液)				使用部位 眼科用として、角 膜、結膜には使 用しない。 その他 本剤の基剤である 油脂性成分 は、コンドーム等 の避妊用ラテッ クスゴム製品の 品質を劣化・破 損する可能性が あるため、接触を 避けさせる。	1日2~3回患部に塗布す る	下記の皮膚真 菌症の治療 白癬：体部白 癬(斑状小水 疱性白癬、頑 癬)、股部白癬 (頑癬)、足部 白癬(汗疱状 白癬) カンジダ症：指 間びらん症、 間擦疹、乳児 寄生菌性紅 斑、爪囲炎、外 陰カンジダ症、 皮膚カンジダ 症 癬風

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効果効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効果効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
抗白癬菌成分	テオコナゾール 医療用医薬品としてなし													
トルナフタート	ハイアラージン軟膏・液 各種真菌類に対するトルナフタートの抗菌力 対象菌 MIC (μg/mL) Trichophyton rubrum 0.0125 T. interdigitale 0.025 T. asteroides 0.025 Microsporumypseum 0.0125 Microsporum japonicum 0.005 Epidermophyton inguinale 0.005 Candida albicans > 500 Cryptococcus neoformans > 500 Aspergillus fumigatus > 500 Aspergillus niger 0.0125			0.1%未満(局所刺激、発赤、皮膚炎等)	頻度不明(過敏症状)		本剤成分過敏症 既往歴	・広範囲の病巣に使用する場合	・患部が化膿しているなど 潤滑、びらん が著しい場合にはあらかじめ適切な処置を行った後使用する。	・長期間使用しても症状の改善が認められない場合は改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。	・眼科用に使用しない。		通常、1日2~3回、適量を患部に塗布又は塗擦する。	汗疱状白癬、頑癬、小水疱性斑状白癬、癬風

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)		併用注意		薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
ピホナゾール	・マイコスポールクリーム ・マイコスポール液	抗真菌作用 ・ピホナゾールは、皮膚糸状菌(Trichophyton属、Microsporum属、Epidermophyton属)、酵母類(Candida属)及び黴菌属(Malassezia furfur)に優れた抗真菌作用を有する。作用機序 ピホナゾールは、真菌細胞に対して二元的な作用機序を有する。低濃度域では細胞膜の必須構成脂質成分であるエルゴステロールの合成を阻害し、高濃度域ではそれに加えて細胞膜のリン脂質と特異的に結合することにより膜の物性を変化させる。いずれの効果も最終的に細胞膜の構造・機能を障害し、その結果、抗真菌作用が発現される。								本剤の成分過敏症既往歴、著しいびらん面	・妊婦(3か月以内)又は妊娠の可能性のある婦人 ・亀裂、びらん面				・眼科用として角膜、結膜には使用しない。 ・著しいびらん面には使用しない。 ・亀裂、びらん面には注意して使用する。		1日1回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌類症の治療 白癬：足部白癬、体部白癬、股部白癬、指間皮膚症、指間皮膚症、間擦疹、皮膚カンジダ症、皮膚カンジダ症
ピロールニリン	医療用医薬品としてなし																	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 差用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
抗ヒスタミン成分	塩酸ソフェンヒドรามミン	外用はなし ジフェンヒド ラミンはあり →レスタミン コーワ軟膏						頻度不明(過敏症)							炎症症状が強い 漫出性の皮膚炎: 適切な外用剤の 使用でその炎症 が軽減後もかゆ みが残る場合に 使用する。		使用部位: 眼の まわりに使用し ない。		通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布また は塗擦する。	尋常性、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ
	マレイン酸ク ロルフェニラ ミン	外用薬とし てなし																		
鎮痒成分	クロタミン	オイラックス	本剤は抗ヒスタミン作用を示さないこと、またヒトの皮膚感覚のうちそう痒感を抑制するが、他の皮膚感覚には影響を与えないことなどから、抗ヒスタミン剤、局所麻酔剤とは作用機序を異にすると考えられる。一般には、皮膚に軽いやく熱感を与え、温覚に対するこの刺激が総合的にそう痒感を消失させるといわれている。					0.1~5%未満(熱感・しやく熱感、刺激症状(ピリピリ感、ひりひり感等)、発赤、発赤増強・紅斑増悪、分泌物増加、濃濁傾向)	5%以上(過敏症)		本剤に対して過敏症の既往歴	高齢者・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人への大量又は長期にわたる広範囲の使用、乳幼児・小児に対する広範囲の使用			炎症症状が強い 漫出性の皮膚炎: 適切な外用剤の 使用でその炎症 が軽減後もかゆ みが残る場合に 使用する。		・眼あるいは眼 周囲及び粘膜に は使用しない。 ・塗布直後、軽い 熱感を生じること があるが、通常 短時間のうちに 消失する。		通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布又は塗 擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊娠の 可能性のある婦人: 大量 かつ広範囲の使用は避け る。	湿疹、尋常性、 神経皮膚炎、 皮膚そう痒症、 小児ストロフル ス
取れん・保護成分	酸化亜鉛	酸化亜鉛	皮膚のたん白質と結合して被膜を形成し、取れん、消炎、保護並びに緩やかな防腐作用を現す。また、浸出液の吸収及び分泌抑制により、創面又は潰瘍面などを乾燥させる。					5%以上または頻度不明(発疹、刺激感等)	5%以上または頻度不明(過敏症状)		濃度または広範囲の熱傷(組織修復の遅延) 患部が湿潤している場所(組織修復の遅延)				使用部位: 眼には使用しない。 使用時、誤って吸入しないよう注意させる。			・外用散剤(散布剤)として15~100% ・軟膏剤・液剤(懸濁剤・リニメント剤・ローション剤等)として2~60% 上記濃度に調製し、いずれも症状に応じ1日1~数回患部に適用する。	軽度の皮膚病変の取れん・消炎・保護・緩和な防腐	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化
評価の視点		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
局所麻酔成分	塩酸ジブカイン ベルカミン注、表面麻酔類似と考へ使用	感覚・求心神経繊維のNa ⁺ チャンネルを遮断することにより局所麻酔作用を発現する。効力、持続性、毒性いずれも最大級の局所麻酔薬であるが、より効力を強めるために局所鎮痛以外の目的にはエピネフリンを添加して用いる		振戦、痙攣等の中毒症状(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眩暈、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等)	頻度不明(過敏症)	本剤に対し過敏症の既往歴	本人又は両親、兄弟に気管支喘息、発疹、尋麻疹等のアレルギー反応を起こしやすい体質。高齢者。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。					使用に際し、目的濃度の水性注射液または水性液として使用する。ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。 仙骨麻酔 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、通常成人10～30mgを使用する。 伝達麻酔(基準最高用量:1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、通常成人3～40mgを使用する。 浸潤麻酔(基準最高用量:1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、通常成人1～40mgを使用する。 表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔には、1～2%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人には1～5滴を点眼する。 ・眼科領域の麻酔には、0.05～0.1%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人には1～5滴を点眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、0.1%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人男子10～20mg、女子3～7mgを使用する。 ・膀胱粘膜麻酔には、0.025～0.05%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人10～20mgを使用する。 ・局所鎮痛には、0.025～0.05%液を用い、適量を使用する。 歯科領域麻酔 0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、伝達麻酔・浸潤麻酔には塩酸ジブカインとして、通常成人1～2mgを使用する。	仙骨麻酔、伝達麻酔、浸潤麻酔、表面麻酔、歯科領域における伝達麻酔・浸潤麻酔	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 差用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
局所麻酔成分	塩酸リドカイン	キシロカイン液「4%」			意識障害、振戦、痙攣等の中毒症状(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眠気、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等)	頻度不明(過敏症)			本剤の成分又はアミド型局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴	・高齢者又は全身状態が不良 ・心刺激伝導障害(症状悪化) ・重症の肝機能障害又は腎機能障害(中毒症状の発現) ・幼児(過量投与・中毒症状の発現) ・高齢者、小児、全身状態が不良、肥満者、呼吸器疾患を有する患者で前投薬や術中に投与した鎮静薬、鎮痛薬等を使用する際				・高齢者：大量又は長期にわたる広範囲の使用 ・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人：大量又は長期にわたる広範囲の使用 ・乳幼児・小児：広範囲の部位への使用しない。 過量投与 徴候、症状 中枢神経系の症状：初期症状として不安、興奮、多弁、口周囲の知覚麻痺、舌のしびれ、ふらつき、聴覚過敏、耳鳴、視覚障害、振戦等があらわれる。症状が進行すると意識消失、全身痙攣があらわれ、これらの症状に伴い低酸素血症、高炭酸ガス血症が生じるおそれがある。より重篤な場合には呼吸停止を来すこともある。 心血管系の症状：血圧低下、徐脈、心筋収縮力低下、心拍出量低下、刺激伝導系の抑制、心室性頻脈及び心室細動等の心室性不整脈、循環虚脱、心停止等があらわれる。		塩酸リドカインとして、通常成人では80~200mg(2~5mL)を使用する。なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。 (使用方法) 耳鼻咽喉科領域 鼻腔内、咽喉に刺激性薬物を塗布する前処置、耳管カテーテル挿入、下甲介切除、鼻中隔矯正、扁桃摘出、咽喉頭鏡検査等の場合本剤の適量(一時に5mL(塩酸リドカインとして200mg)以内)を塗布又は噴霧する。 泌尿器科領域 膀胱鏡検査、尿管カテーテル挿入、逆行性腎盂造影法、瘧血除去、結石処置、経尿道式尿道乳頭腫切除等の場合4%液を倍量に希釈し、その約10mL(塩酸リドカインとして200mg)を尿道内に注入し、男子では陰茎を指挿子ではさみ、女子には棉栓を施して5~10分間、液を尿道内に貯留させる。 気管支鏡検査 全身麻酔時の挿管には本剤を倍量に希釈し、その適量(10mL(塩酸リドカインとして200mg)以内)を噴霧する。 幼児(特に3歳以下)：低用量から投与を開始(麻酔効果の把握が困難なため高用量又は頻回投与とされやすい)	表面麻酔

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 差用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上りがあるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ					
殺菌・消毒成分	塩酸クロルヘキシジン	グルコン酸塩として5%ヒビテン液	抗菌作用 (in vitro試験) ・広範囲の微生物に作用し、グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。 ・グラム陰性菌には比較的低濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。 ・芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。 ・結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。 ・真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。 ・ウイルスに対する効力は確定していない。 作用機序 作用機序は十分には解明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起し、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起すことが報告されている。			ショック(0.1%未満)		0.1%未満(過敏症)			・カロールヘキシジン製剤過敏症の既往歴 ・脳、脊髄、耳(内耳、中耳、外耳)(聴神経及び中枢神経に対して直接使用了場合は、聴覚、神経障害を来すことがある。) ・膈、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状の発現が報告されている。) ・産婦人科用(膈・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外性器の消毒等)には使用しない。 ・眼	・薬物過敏症の既往歴 ・喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴				・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・外用にのみ使用する。 ・眼に入らないように注意する。			本品は下記の濃度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 (使用例) ①手指・皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (0.5%エタノール溶液) ③皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液) ④医療用具の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(10~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上)) ⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液)		

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 副作用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(服用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(服用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量(上限)があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
殺菌・消毒成分	塩化ベンザルコニウム	0.1w/v%チアミトール水						頻度不明(過敏症)		粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと				<ul style="list-style-type: none"> 原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する(刺激性がある)。 炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用: 正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。 使用後は滅菌精製水で水洗する。 深い創傷または眼に使用する希釈水溶液は、調製後滅菌処理すること。 経口投与しないこと。洗眼には使用しないこと。 密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。 		<ul style="list-style-type: none"> 粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと(全身吸収による筋脱力がある)。 	<p>効能・効果: 用法・用量 (塩化ベンザルコニウム濃度)</p> <p>① 手指・皮膚の消毒: 通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落とし、その後、塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする。</p> <p>② 手術部位(手術野)の皮膚の消毒: 手術前局所皮膚面を塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.2%溶液を塗布する。</p> <p>③ 手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒: 塩化ベンザルコニウム0.01~0.025%溶液を用いる。</p> <p>④ 感染皮膚面の消毒: 塩化ベンザルコニウム0.01%溶液を用いる。</p> <p>⑤ 医療用具の消毒: 塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するか、または厳密に消毒する際は、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.1%溶液中で15分間煮沸する。</p> <p>⑥ 手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒: 塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を布片で塗布・清拭するか、または噴霧する。</p> <p>⑦ 腫洗浄 塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。</p> <p>⑧ 結膜囊の洗浄・消毒 塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。</p> <p>・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用: 正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい</p>

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 副作用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
殺菌・消毒成分	フェノール	フェノール	本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。					頻度不明(過敏症)			・損傷皮膚及び粘膜(吸収され中毒症状発現)			・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には腐蝕及び吸収され、中毒症状を起こすことがある ・眼に入らないように注意すること。 ・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包帯、ギプス包帯、パックに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。〔吸収され、中毒症状を起こすおそれがある。〕 ・顔軟を避けるため、保管及び取扱いは十分注意すること。	・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には腐蝕及び吸収され、中毒症状を起こすことがある ・眼に入らないように注意すること。 ・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包帯、ギプス包帯、パックに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。〔吸収され、中毒症状を起こすおそれがある。〕 ・顔軟を避けるため、保管及び取扱いは十分注意すること。	長期間に使用しないこと。(吸収され、中毒症状の発現のおそれ。)		効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェノールとして1.5~2%溶液を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) 排泄物の消毒:フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒痒疹(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液: フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍)	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		濫用に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ						長期使用による健康被害のおそれ				
角質溶解成分	サリチル酸	サリチル酸	角質溶解作用。細胞間基質を溶解し鱗屑の剝離を促進して角質増殖皮膚を軟化させる作用がある。防腐作用。微生物(白せん菌類など)に対して抗菌性があり、その防腐力、石炭酸に匹敵する。					頻度不明(発赤、紅斑等の症状、長期・大量使用で内服・注射等全身的投与の場合と同様な副作用)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴	妊婦又は妊婦している可能性のある婦人、未熟児、新生児、乳児、小児	患部が化膿しているなど溼潤、び爛が著しい場合、あらかじめ適切な処置を行った後使用。		広範囲の病巣に使用した場合：副作用があらわれやすいので注意して使用。眼下部には使用しないこと。	長期・大量使用で内服、注射等全身的投与の場合と同様な副作用発現のおそれ。長期間使用しても症状の改善が認められない場合は、改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい		1.通常サリチル酸として、50%の絆創膏を用い、2～5日ごとに取りかえる。2.次の濃度の軟膏剤又は液剤とし、1日1～2回塗布または散布する。小児：サリチル酸として0.1～3%、成人：サリチル酸として2～10%	1.視覚・顕眼・膀胱腫の角質剝離。 2.乾癬、白癬(頭部浅在性白癬、小水疱性斑状白癬、汗疱状白癬、頑癬)、皰風、紅色靴癬疹、紅色陰癬、角化症(尋常性魚鱗癬、先天性魚鱗癬、毛孔性苔癬、先天性手掌足底角化症(腫)、ダリエー病、遠山運團状靴癬疹)、湿疹(角化を伴う)、口囲皮膚炎、掌蹠膿疱症、ヘブラ靴癬疹、アトピー性皮膚炎、さ瘡、せつ、腋臭症、多汗症、その他角化性の皮膚疾患
消炎成分	グリチルレチン酸	テルマクリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造がハイドロコチソンの化学構造に類似しているところによると推定される。					5%以上又は頻度不明(過敏症)						眼科用として使用しない		通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎		